

27. 俵づめ

今は米は紙やビニール系の袋に入っているが、米は長らく藁で編んだ俵(たわら)に詰めた。俵に詰めて縄を締める。秤で計量する場面は共同作業だった。

- 斗枘と斗掻き

A はイットマス(一斗枘)。俵に詰める時の計量に使うので把手がついている。直径32cm、高さ32cm。「大阪 榎木製」の焼印と大正10年(1921)購入の墨書がある。

左脇の丸棒は一般に斗掻き(とかき)と呼んでいるもので直径6cm、長さが39.5cm。正確なすりきり一杯を量るためのもの。摂津市域で何と呼んだか未確認。

たわらじょうご

B は米を俵に詰める時の大型のじょうご(上戸、漏斗)で、上縁の直径56cm、下縁直径は19cm。高さ35cm。資料カードは「俵じょうご」。

俵づめ

C は「摂津国各郡農具略図」の島下郡の俵ごしらえの図で「米ヲ量ルニ皮団扇ヲ以テ塵を拂フ...五斗二升五合入り」とあるが、のちには1俵は4斗が標準。俵はミ(身)とカワ(皮)の2重になっていてタワラノヘタ(さんだわら)を当てた(鳥飼八町)。

こめさし

D は米さし。長さ50.5cmで、尖った先を俵に刺しサンプル米を抜いて検査する。

チギと分銅

E の分銅は F のチギと同家の寄贈品なのでセットであろう。分銅は直径8.7cm、高さ13cmで「定錘/秤量八拾匁」とある。80kgは尺貫法の21貫333匁。

F はチギ。竿の長さ126cmの大型の竿ばかりで、全高16cmの大きな鉤がつく。

チギで俵を計量する

チギで俵をはかる時は、男が2人天秤棒の両端を担ぎ、真ん中にチギを直角方向に吊るして俵を引っかけて持ち上げ、もう1人が分銅を動かして目盛りを読む(鳥飼下)。

俵は4斗入りで16貫。「20貫チギを男2人でカカンナラン(昇かねばならない)。チギが下がっていると「ちょっとさぶいな-」いうて、中(中の俵)割って米2~3合サス(米差しで追加する)。足らないと不合格の判おしはる」(三島)。

10俵とれば上々

米の収量は1反あたり何俵とれるかで表わした。ドタでは5~6俵ぐらい(一津屋)。1反で10俵とれると1畝(せ)で1俵となるのでセビヨウ(畝俵)といった(別府)。

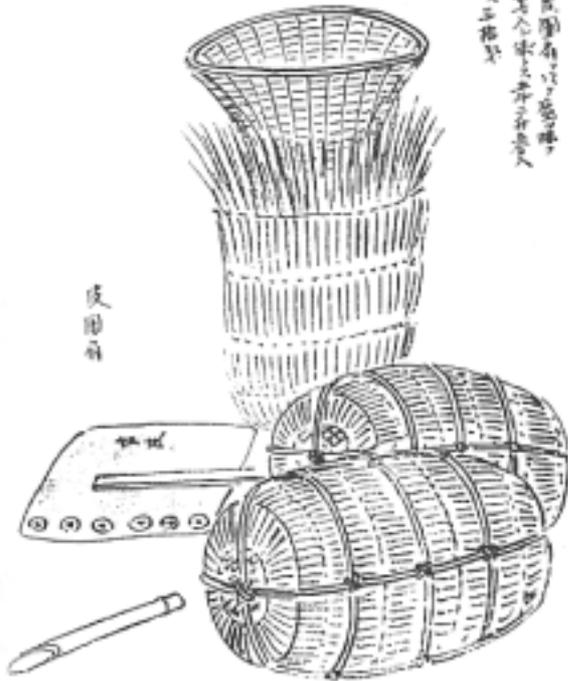
A



B



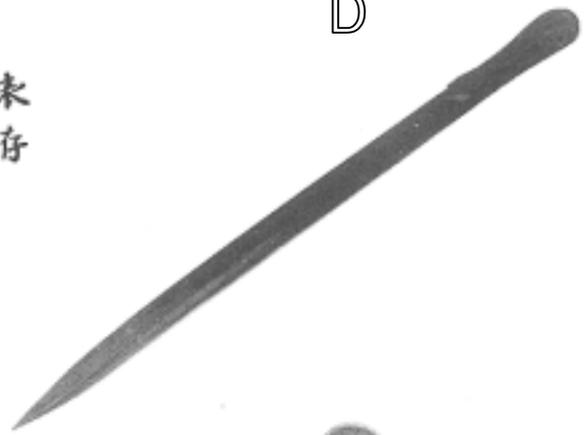
C



休持
 本器は、古くは、
 舟に、乗る、人、の、
 荷物、を、運ぶ、
 代、り、と、
 用、さ、れ、
 だ、と、
 言、わ、れ、
 る、と、
 思、わ、
 る、

皮
 目
 箱

D



E



F

